

蘇山也、

〔扶桑略記二十九條〕治曆四年六月廿四日、肥後國阿蘇山雪降深五六寸、

○阿蘇山ノ事ハ又火山ノ條ニアリ、參看スペシ、

〔書言字考節用集一乾坤〕タカチホノミコト高千穗嶺タカチホノミコト日州宮崎郡瓊々杵尊降臨之地、

〔和漢三才圖會八十向〕高千穗嶺 延岡近處、總稱高千穗莊、

〔魔藩名勝考二〕贈喰郡舊作襲曾添贈於皆古之襲國也、和名鈔贈喰曾於襲疊嶂之義、又曰脅矣之脅之義、姓氏錄序曰天孫降襲西化之時

高千穗峯、日本紀、古事記序作高千嶺、按高々山、千獨秀於千山之稱、穗者凡物拔出子上之稱、亦言是山之翹楚於衆峯也、一說千穗祝稱也、猶水穗之穗、一說穗卽火也、火常炎山上、因名焉、一說峯有穂、生稻穗、故名焉、大隅日向之界在山半、東屬諸縣郡、西屬贈喰郡、故史多係諸縣郡者矣、然日本紀謂襲之高千穗、續紀亦謂贈於郡曾乃峯、則宜以收贈於郡、不可以繫諸縣郡、今據之、後皆倣之、

一名穗觸、二上峯、言靈歷也、二上者此山上二峯突峭、東號矛峯、絕頂建矛、是大己貴所以奉獻於皇孫之物、而皇孫降臨于茲、安置諸山、以鎮標天下萬世者也、西號火常峯、火常火上、後世終陷凹、今俗呼其火坑、稱御鉢、臨之如千仞谷、史註謂靈矛長八尺許、今其鋒折て幹のみ立り、鋒鐸に近き所、長鼻大眼の面係を左右に記し成せり、其鐸は昔時山頂炎たりし時移したりとて、今三里許の山麓に安置し奉りて、荒嶽權現と稱す、此所都城の内、鋒の長サ一尺五六寸、鐸の如キ所に雲氣の状を鑄付して見えたる、或云、靈矛は純金なり、餘鋒幹ともに親鑒熟視せしが、其質材何金たること知がたし、山上にあるものは、其色縹緑なり、其鋒は黝黒色なり、蓋露處と密藏との異なるべし、日本紀通證などにいふ所は甚的當せず、

天明初年、魔府下有黠商池田某、新鑄神矛、配立其傍、周圍形製稍倣之、噫名文之不正、何一到于此、孰知無不知、林放之嘆、深可以疾矣、而某始立此僞矛于山上、時怪異百出、且某發異疾暴死、其子又爲顛